

DHARMA EYE



法眼

ヨーロッパ国際布教総監に就任して

今村源宗

ヨーロッパ国際布教総監

このたび、原田雪溪ヨーロッパ国際布教総監が、一身上の事情により辞任し2004年8月21日をもって総監に任命されイタリア国ミラノ市の総監部に赴任いたしました。

前総監同様、欧州各地の特別寺院、道場並びに国際布教師、伝道教師、伝道師各々の活動と福利のために努力するとともに各国国際布教総監部と一層の連携、連絡を密にして互いの向上に努めたく念願しております。

どうか、積極的なご意見及び提言、助言など頂き、良き宗門の一員として共に手を携えて活動し、お互いに和合協力し、欧州の宗門共同体がさらなる発展に到りますよう希望しております。

初代総監弟子丸泰仙師が遷化してすでに20数年を経過するとはいえ、師の残した偉大な影響力はそのたくさんの門下を中心に今なお欧州各地に活かされているといえましょう。他方、日本の僧堂で修行した新しい世代の指導者もこれからは増えてゆくことでしょう。お互いが、それぞれに得た体験や心境の尊厳性はともに認め、互いを比較、批判したりという、先人が往々にしておかしてきた過ちを繰り返すことなく、ただ道元禅師、瑩山禅師の精神でのみ各自の脚下を照らし顧み、さらなる修行を深めてゆけるよう良き緊張と協調を保ってゆければと思います。

他方、ヨーロッパ各国に国際布教師、伝道教師、伝道師が増えてそれぞれが真摯に活動している現状をみると、宗制上の問題として、日本国内の僧と外国籍僧との僧籍や資格上の様々な格差の是正その他について、現地の責任者として皆の要望や意見を伝えてゆかなければならない役割も、果たしてゆかなければなりません。それらは、宗門の歴史的、制度的な要因があつて一朝一夕にはなかなか改まらない面があるでしょうが、世界規模での歴史の変化は私たちの想像を超え速やかであることを覚知し、迅速な対応と均一的制度の確立を計るべき時がきていると思うのです。それは、将来宗門の教学、教化、伝道の発展、振興に必ずや相互に寄与するものと私は確信しております。これに対する働きかけは勿論一人の能くするところではありません。各国、各地、各師の自覚と協調と協力が能く宗門の戸を敲きそして開いてゆくことでしょう。宗門も一歩を進めて、両祖の広き誓願の門を開いて頂きたいと思うのです。

宗門内にはヨーロッパの国際布教の立場や現況に対し、いろいろ

ろな見方、意見があるようです。なかには否定的見解をお持ちの方もいると思います。しかし、それが誤解や偏見に基づくものであるとしたら、それはヨーロッパ国際布教の責任を担う任にある私一身の責任とすべきで、宗門の坐禅を信じ両祖の教えを信じ実践する伝道の友の責に帰すべきものではありません。(宗門上の権利も義務も未だ与えられていないというほうが正しいでしょうか)

私は皆様の良き声を糧として、与えられたこの機会とこの任と責務を全うすべく覚悟しております。僭越をお許しください。

ペルーにおける曹洞宗開教100周年を記念する

レスニエヴィエ・道久

アルゼンチン・ブエノスアイレス 安楽寺住職

南アメリカ開教100周年記念行事への招待状をいただいてから数日後、毎週一緒に坐禅を行っている人たちにそのことを話しました。その一週間後、彼らの一人が私のところにやってきて慈恩寺について書いてあるウェブサイトを見つけたと教えてくれました。その日の夜、坐禅会が終わったあと、家に戻るとすぐにコンピューターのスイッチを入れそのウェブサイトを探しました。それはすぐに見つかり、大田宏人氏によって書かれた『ペルーにおける最初の開教師 - 知られざる百年の歴史』と題する論文がありました。

その論文を読みながら、わたしは『正法眼蔵随聞記』で読んだ次のような箇所を思い起こしていました。そこで道元禅師はこう語っています。「今わたしは僧堂を建立するために布施を募り精一杯働いている。しかし、それが必ずしも仏法の興隆に寄与することになるとは思っていない。これはひとえに人々が今の時代に道を修することができるよう坐禅を修行する場を創設せんがための努力である。たとえ願を立て、とりかかった仕事の実現しなかったとしても決して後悔はしないだろう。後世の人々が未完に終わったけれどもこういう事業を思い立った人がかつていたのだなと思ってくれさえすれば、たとえ柱が一本立っただけに終わってもそれを気にかけたりはしない」

記念行事の次第はまず8月24日から27日までの接心から始まりました。それに続いて28日と29日にはペルーにおける曹洞禅の開教百周年を記念するさまざまな法要がリマとカニエテで慈恩寺と日系人コミュニティの連携を得てとりおこなわれました。その日が来ると、わたしは飛行機に乗ってブエノスアイレスを立ちリマに着きました。それから、他の曹洞宗僧侶たちが式典の間宿泊しているホテルに直行しました。その日の午後、法要の準備の

手助けしているペルー人修行者のネスター・カスティラに偶然に出会いました。最善のラテン人的やり方でわたしたち2人は長年の知り合いであるかのように、ペルーにおける禅について或る時は彼の方から、或る時は私の方から話題を出して話し合いをしました。100周年記念のことについても話をしました。5階にある彼の部屋まで荷物を運ぶ手伝いをしたのですが、そこで古溪師と南原師に出会いました。彼らとはペルーに来る前から電子メールを通じて接触があったのです。まず日本語での話があって緑茶を一緒に飲み、永平寺で一緒に修行した何人かの僧侶たちとも会いました。すぐに親密な感じがわたしたちの間に生まれました。

それからわたしは部屋に戻り、8月28日にペルー・日本協会で行なわれる会議で発表する予定の『宗教と世界平和』という題の草稿の仕上げにかかりました。この話にはカトリック神父のヒューバート・ランシェーさんが一緒に加わります。8月24日の朝早くホテルを立ってリマから10キロほど離れたところにあるパチャカマクに向いました。そこで接心をするためです。パチャカマクは接心やグループの活動をするための場所で大きな庭とたくさんのお木に囲まれたところです。緑豊かでとても静かな場所です。坐禅の初心者や古参の修行者と一緒に坐禅を行じるにはもってこいの環境です。参加者の半分はペルー人で残りはブラジル、北アメリカ、アルゼンチンから来た日本人ではない(しかし日本での修行経験がある)僧侶たちでした。面白いことにわたしたちは共通語として日本語を使いました。

リマでの法要が日秘文化会館において28日から始まりしました。それより数日前、空っぽだった大広間が200名の客を迎え入れる準備がなされ、壇上には最も格の高い法要を行うことができるような祭壇が設けられました。この日、わたしは法要の間、日本語をスペイン語に通訳するという責務を負っていました。この初めての経験にわたしは興奮していました。会食の席で乾杯の音頭がとられるまでにはわたしのこころには落ち着きもどっていました。他の僧侶の方々の表情にも同じように落ち着きが漂っていました。

しかし、わたしたちにはもう一日、リマから70キロ離れたところにあるカネエテでの行事が残っていました。それで翌日、朝早く出発して慈恩寺での法要の準備を行ないました。ここでの法要には400名の人々が参列しました。そのなかにはリマ周辺からやってきた日本人の子孫の代表者たちがいました。彼らは慈恩寺の開山と自分達の先祖に敬意を表するために来たのです。台所での仕事振りにはとても感心させられました。そこの簡素な台所でバンケットの準備のために最善を尽くして働いているすべての女性たちの活力を感じることができました。ガスのタンクに問題が生じてプログラムの変更を余儀なくされましたが、最後にはカネエテから届けられたおいしく調理された食べ物をお口にすることができました。メニューにはお餅も加えられていました。この食事がすべての祝いの結びでした。

ブエノスアイレスに帰ってから毎週一緒に坐禅をしている人たちにこの経験を話して聞かせました。先に述べた『随聞記』の一節を読み上げ、たとえ一本の柱が立とうと立つまいと、すべての

仏祖たちによって今日まで伝えられてきた坐禅=あらゆる言葉、国、伝統を超越しているものを行じ続けていこうと語りました。南アメリカではこの法はまだ最初の一步を踏み出したばかりです。新しい世代の僧侶たちがわたしたちの先祖たちのたどった道に従って坐禅の修行を懸命に続けています。たとえその結果を目にすることができないとしても法の種はもうすでにこの土地に広がっているのです。将来、人々が一緒になって、最近ペルーで行なわれたのと同じような仕方です。100周年を祝う記念行事がこの地でも行なわれることを望んでいます。

ペルーでの接心

ズリー・ガルシア

8月24日から27日までリマから南に25キロ行ったところにあるパチャカマクのカサ・アティンクで接心が行なわれました。この建物は木、植物、花、内省と自然との一体感を誘う自然の風景に囲まれた美しい緑の土地にあります。

この接心はわたしにとって初めての経験でした。それがどういふものなのかははっきりとは理解できてはいませんが、ともかくこの接心に参加できたことはとても幸運だったと感じています。

黒い色の衣をまとい平穏な顔つきをした僧侶の一団に会った時、はじめのうちは少し不安を感じていました。はたして自分は坐禅中にすべてのことを間違わないでやれるだろうかと思ったのです。何人かの僧侶や参加者と話をした後はそんな心配は無用であり、すべての人が一緒に学ぶためにここに来ているのだということがわかりました。

昼食や夕食中にはお互いのことをよく知るための機会が持て、自分自身や禅に関する経験について話しました。個人的には彼らがいっただいどういふ生活をしているのかをもっと知りたいと思っていました。

作務の時間に印象に残ることがありました。三好師が庭の道をきれいにしているのを見ましたが、彼は着替えをして頭にタオルのようなものを着けていました。宮川師と他の全員もその活動をしていました。それはわたしたちに謙虚さということを教えてくれました。

宮川師から一緒に梅花を詠うのを習うのはとても楽しいことでした。かれは大変辛抱強くユーモアのセンスをもって正しい梅華のやりかたを教えてくださいました。師の講義のおかげで坐禅や坐禅にどういふことを期待すべきかということについてよりよい理解が得られました。講義の後ではそこで聞いたことをもっとよく考えてみようという気になりましたし、もっと禅についての本を読もうと思いました。

接心に続いてペルーにおける曹洞宗開教100周年記念の式典がありました。その時に、わたしたちは聴衆の前で梅花をお唱え

するように依頼されました。そういうことは思ってもみなかったので本番の前に少し練習をしなければなりません。緊張して臨みましたがベストを尽くして演じました。

ろうそくをともしての式典で電灯が消された時には大変感動しました。参加者たちはその時自分たちの先祖のことを思い起こしてうれしく思っていると感じることができました。それは非常に宗教的な時間でした。

接心のあと、わたしはひとりになって、聞いたことや経験したことを心の中で反芻する必要がありました。いままでよりももっと真剣に坐禅を続けようと決心しました。坐禅は人々との関係の持ち方をよりよいものにする、慈悲の心を持つこと、自分自身についてより深く知ることを助けてくれています。それは切れ目のない学びなのです。

接心での経験のあと、わたしたちのサンガはより緊密になり、学んだことをより多くの人々にわかちあっています。将来、このグループをより確固としたものにするために、僧侶がここに来てくれることを望んでいます。

2004年伝道教師研修所の印象

クイツァオウ・海龍・トーマス

ドイツ禅協会 会計幹事

日本の愛媛県にある瑞応寺での伝道教師研修所のことを振り返るとき、自分の師であるL・天龍師に深い感謝の念を禁じえません。師のおかげでわたしはドイツで長く濃密な禅の修行をしたあと伝統的な禅修行を行なうことができる正統的な場所に行くことができました。わたしの属しているサンガにも感謝します。彼らからの経済的援助がなかったら日本への旅はできませんでした。楠崎通元老師と瑞応寺の僧侶達が示してくれた、わたしたち海外からの訪問者への心のこもったそして好意的なもてなしにも感謝します。多大の労力とスタッフを使ってこの研修全体を準備しすべての者に考えられる限りの援助を惜しまなかった曹洞宗宗務庁に感謝します。とりわけ、31日間にわたって禅の僧堂修行についてできる限り多くのことわたしたちに伝えようと努力してくださった宗務庁スタッフの努力にここから感謝します。多くの老師がたにも感謝いたします。禅修行のさまざまな根本的問題について提唱するために遠路はるばる足を運んでくださった老師方もおられました。最後になりましたが、わたしたちを迎え入れて親切に宿泊させてくれた永平寺と總持寺にも感謝します。

修行を始めた最初から、わたしはずっと伝統的な禅の道に関心を抱いていました。天龍師の指導のもとに強固で安定したサンガがドイツで発達していますが、伝統的な僧堂修行ができるような条件を創り出すのはわたしたちのような生活リズム（仕事をしながら禅の修行をすること）の元では大変困難です。それでわたしたちは禅の本質的な部分だけに力を集中してきました。それは坐禅、最も重要なお経を用いた法要、応量器、作務、作法など

です。こうした修行はわたしたちの置かれている生活の状況にうまく適合したものでなければなりません。弟子達はすべて仕事に出かけなければならないからです。その仕事によって生活の糧を得、禅の修行も同時にしているのです。こうした状況はしばしば困難さや金銭的な問題を引き起こします。

研修所が始まった時、普段の仕事のストレスに追われる生活から出てきて急に研修所のプログラム（その多くはわたしの知らないものでした）に従わなければならなくなり、いきなり僧堂修行に「放り込まれる」ことは容易ではありませんでした。とりわけ初期のころは、なんの準備もなしに典型的に「日本的な」指示に従うことが非常に困難でした。指示に従ってすばやく、直接に、そして柔軟に事をやれるようになるには時間がかかりました。

もちろんそれ以前にわたしは日本の禅の僧堂を訪ねたことがありましたが、日本での修行の経験も少しはありました。しかし、そのどちらも短い期間でした。瑞応寺の状況はそれらとは大変違っていました。寺に入るや否や、そこが伝統的な禅の修行をするための正統的な場所であることを感じました。すべてのものがそれ本来の場所にきちんとあるのです。祖師たちの精神がそこにありました。仏祖たちの何世紀にもわたる禅の修行がはっきりと感じられました。家にたどり着いたという深い感情が湧いてきました。直接にそして非常に实际的に、僧堂修行の原点というものを理解できましたし、他の僧侶達と一緒に自分自身の修行を通してそれを見出すことができました。

僧堂は特にわたしに深い印象を残しました。この建物のなかで、他の僧侶と一緒に坐禅をし、法要をし、応量器で食事をいただき、道場の他の活動をすることができるということはとてもうれしいことでした。この印象は本国に戻ったあともまだその余韻が続いています。わたしたちの禅センターである寂光寺に僧堂を建てるというわたしが長い間抱いてきた願いがますます強いものになりました。残念ながら今はそれを実現する手だてがありませんし、既存の建物を改善するという作業もまだ完全ではありません。しかし、いつか将来、寂光寺で僧堂修行の経験が可能になることをここから願っています。

もうひとつの忘れられない印象は、瑞応寺の大衆がわたしたちをカブけ彼らの普段の僧堂生活に加わるよう促す際に見せた心のこもったそしてオープンな態度です。楠崎老師の親切で思いやりのあるカリスマ性には大変感動しましたから、師があいにくの自然災害（台風のもたらした雨が裏山に地すべりを起こしたこと）のことに煩わされていなければよかったのと思います。宗務庁からのスタッフが示した熱心さと辛抱強さは賞讃に値します。特に大岳さん、彼は常にわかりやすい通訳をしてくれ、修行の細かい点について教えてくれました。

時間が限られていたし、スタッフはもちろん研修所期間の間になるべくたくさんのお話をもちこもうとしましたから、時にはストレスが生まれることは避けられませんでした。しかし、困難さにもかかわらず、それに慣れてからはあらゆる問題をうまく扱うことができました。この点に関して大変助けになったのは研修生

同士の良好な人間関係でした。研修生達ももっていたオープンさ、相互の尊敬、ユーモア、他の人の修行への関心といったもののおかげです。提唱について言えば時々少し長すぎたので主題の全部を聞くことができなかつたというのがわたしの意見です。

宗務庁のスタッフや瑞応寺の僧侶たちと時々、温泉に行ったり、托鉢に出たり、観光に行ったりしたことは特に楽しい経験でした。出発の前の日もたれた送別会で僧侶たちがわたしたちについての感想を述べたときはとても感動しました。

自国にもどってから、しばしば研修所のことを考えます。ドイツのサンガの人々はわたしの日本での経験について大変な関心を持っています。しばらくの間、わたしは瑞応寺での伝道教師研修所や拝登に行った永平寺と総持寺で撮ったたくさんの写真を多くの友人にみせて説明しました。

もちろん、研修所で学んだことの中で、わたし達の現在の修行にそのまま使えるようなことはあまりありません。しかし、本質的な点はわたしに深い印象を残しました。それは仏祖たちの正統的な修行、伝統的な道のありかたです。それはまた、わたしたちにはまだまだ日本から学ぶことがたくさんあり、お互いにやり取りしあうことには意味がありまた必要だという認識です。

個人的な関係を作ることができたというのはとてもよかったと思います。助けが必要になったり、僧堂などに訪れなくなつたらいつでも、新しい友人たちにたずねることができると思います。また、他の伝道教師達との新しい結びつきを深めていくよう努力するつもりです。

最後に、伝道教師研修所で過ごした時間は、わたしにとって大変励みになるものでしたし、私自身の修行を豊かにし肥やしてくれました。しかし今ここで、わたしたちは現在可能なこと、つまり坐禅に全力を挙げて取り組まなくてはなりません。不動の坐禅の姿勢と結びついて、伝統的な道を深め伝えて生きたいという望みが湧いてきました。

2004年伝道教師研修所についての所感

ウェンダー・本修

グリーンガルチ禅センター、サウサリト、カリフォルニア、USA

伝道教師研修所に参加しないかというお誘いが届いたのは、タサハラ禅センターでの2年間にわたる単頭職の任期が終わりに近づいた頃でした。わたしは僧堂での修行はもう10年近く続けてきていますし、グリーンガルチ禅センターでの共同生活はさらに長い期間にわたって経験していますが、日本の伝統的な僧堂修行はまだ経験したことがありませんでした。われわれの禅センターにおける僧堂修行の形態は永平寺のやりかたに基づいたものです。わたしはそれを長年にわたって学び、行じ、人に教えてきました。その元になっている日本の伝統的な僧堂修行についてもっと深く知り、どこが本質的な部分なのかをもっとはっきりと理

解し、わたしたち自身の状況と文化にそれを最もうまく適合させるにはどうすればよいかについてよりよい考えをもちたいとずっと願ってきました。瑞応寺での僧堂修行は道元禅師によって説かれた伝統的形態に重点がおかれていますから、こうした参究にはまたとない機会でした。

瑞応寺において日々の差定に従って生活すること、それだけでも深い満足感が得られました。何もかもがわたしにとって親しいものに感じられました。もちろん違いもありました。より厳格であるとかより複雑であるといった点です。たとえばタサハラには法堂というものがありません。ですからわたしたちは坐禅をしたあとその同じ場所で朝課をします。日本の僧侶にとってそんなことは思いもよらないでしょう。坐禅の後そこから立ちあがり、鐘の合図を待ってから一緒に法堂へ赴き、三会目の殿鐘で入堂するのが当然だと考えているからです。わたしにとって法堂に入りそこでの法要に加わるというのは驚くほど感動的な経験でした。形式の複雑さという問題、僧堂や法堂の建築についての問題、大きな仏壇についての疑問、より深い綿密さと注意深さを養うための要求と許可という問題……。こういった問題については今後も参究を続けていきたいと思っています。

「茶色の袈裟」を着た古参僧であると同時に基本的な僧堂の決まりをまだ完全には知っていない初心僧であるということはいつも容易であるという訳にはいきませんでした。坐禅をするために単にきちんと上がり、ただちに脚を組み、単の下に自分のスリッパをきちんとそろえて置き、衣をみださないようにしながら体の向きを変えるのは毎日かなり苦勞しました。侍者や侍香のやりかたはもう十分に知っている自分では思っていました。瑞応寺の若い僧侶達からまだまだ学ぶべき多くのことがあるとわかりました。彼らはとても優雅で迅速でしかも正確な身ごなしで進退を行っていたからです。お袈裟のつけ方をおぼえたと思ったら、誰かに袈裟の折り目が正しい場所でないことを指摘されたり、法界定印がゆがんでいることを教えられたりしました。こうした細かい指導—おじぎの仕方、笏の持ちかた、永平寺式と総持寺式のお袈裟のつけ方、導師のやり方—はたいへん有益でした。

わたしはとりわけお袈裟を縫うこと、そして梅花に興味を持っていますから、僧侶たちといっしょにその講習に加わることができてたいへん嬉しく思いました。恒例の達磨忌や托鉢に随喜できたことも素晴らしいことでした。

研修所に参加して思いがけず益になったのは、他の研修生たちと共に親しく修行ができたことです。わたしたちは法系も修行環境もそれぞれに違っていますが、8人の研修生が一体となつて一日中動いたという感じを持たれた時がありました。フランス、ドイツ、スイス、そしてアメリカの他の場所で、曹洞禅がどのように行じられているか、伝えられているかについて彼らと討議できたことをありがたく思っています。

研修期間を通じて、本国に帰ったあと研修所での経験が自分達の修行をどのように教え導いていくのかという問いがいつも念頭にありました。この問いに答が出るには時を待たなければならな

いでしょう。しかし、ここで研修所を出てからまもなくの時に体験したことをいくつか記しておきましょう。

友人と一緒に富士山の近くにあるある曹洞宗の寺を訪ねました。そこでは年次法要が行なわれており、友人はその茶室でお茶をたてるつもりでいました。わたしたちが到着したのは法要がまさに始まろうとしている時でした。急いで法衣に着替えお堂に入ると、そこに大般若経の箱が並べられているのを目にしました。それでわたしはこの寺が總持寺系の寺であり、転読般若をするのだなということがわかりました。わたしはそれを一度だけやったことがありました—その日の朝、總持寺で！。大間にはたくさんの随喜寺院さんが並んでおり、中央に空席がありました。みんながわたしにそこに行けと身振りで教えています。わたしは緊張しながら自分に言いかけました。「わたしは訓練を積んだお坊さんなんだ」と。そしてその法要に加わりました。

次の朝、住職さんから年忌法要を2回やるから導師をお願いしたいと言われました。そして自分ももっと複雑な拳経と堂行をやるからというのです。そこでわたしはまた研修所での訓練を思い起こしました。「總持寺式、笏はまっすぐに立てること・・・」そしてなんとかつとめあげることができました。その後、少しの間でしたが、雲間が見え、富士山を初めて眺めることができたのでした。

ありがたいことに、青山俊董老師が私を名古屋の尼僧堂から自坊である無量寺まで連れて行ってくださいました。青山老師は禅と茶の湯の両方の分野での師匠（わたしもそうなのです）ですから、お会いしたいとずっと長い間願ってきました。次の日の朝、ふたりの常住の尼僧さんに加わって朝課に随喜しました。瑞応寺での訓練を経たおかげで形式も式文もよく知っていました。何をどうすればよいか（ほとんど）わかりました。尼僧さんたちは読経の声が加わったことを喜んでくれたようです。

後に、わたしは彼女達と茶の湯に適した着物のことについて話をしました。彼女達は私の着ている着物を見て叫びました。「まあ！これは男物の着物ですよ」そんなことは今まで考えたこともありませんでした。その着物は仏具店に既製品として売っていたものです。後になってわたしはこういうことを考えました。それは、わたしの着物の袖が女物でなくても大丈夫かどうかということではなく、大半の曹洞宗寺院に物品を納めている仏具店でさえどうやら尼僧用の着物を置いていないらしいというのはどういうことだろうか、ということです。日本には何人の尼僧がいるのか？日本よりも西洋のほうがたくさんの尼僧がいるのだろうか？西洋の方がよりたくさんの女性が僧堂修行をしているのだろうか？西洋においてのほうがより多くの若い女性が禅の修行に志しているのだろうか？

グリーンガルチにもどってから、僧侶の集まりで研修所において経験したこと、そしてそこで学んだ形式について話をしました。わたしたちの禅センターの形式のいくつかは通常の曹洞宗の形式と若干異なっています。それを変更する可能性について討論をしました。

研修所はわたしにとって曹洞禅の伝統的僧堂修行を体験することができた、たいへん価値のあるそして貴重な機会でした。研修所の運営は基本的には大変うまくいったと思います。将来においては、もっと日本の僧侶達と一緒にやる活動（たとえば掃除など）をもっと増やせばいいのではないのでしょうか。今回、幸運にも聖護寺から英語と日本語を話せる2名の西洋人僧侶が参加してくれ、わたしたちと日本人僧侶の間の取り持ち役をして助けてくれました。

もっと学びたいと思ったことは僧堂の機構と役寮の役割についてです。もうひとつは女性修行者の役割—彼女達の訓練と修行ということです。女性の指導者を講師の1人として招聘することはできないのでしょうか。

植崎通元老師と瑞応寺の雲水さんたちにはわたしたちを瑞応寺に迎え入れてくださったことに深く感謝いたします。ルメー大岳さん、南原一貫さん、古溪理哉さん、そして曹洞宗のスタッフのみなさんには、懇切かつ辛抱強く素晴らしい教示をいただいたことを心からお礼申し上げます。わたしたちが必要としていることに対して瑞応寺がきわめて柔軟に対処してくれたことをありがたく思います。また僧堂修行の中にわたしたちを包み込む瑞応寺の包容力に大変感動しました。今後とも一緒に修行していけることを祈っております。

打坐をめぐる断想集 私の『坐禅参究帖』（十四）

藤田一照

《断想 23》 坐禅と覚知

我々は誰でも、感覚的には「心地よいこと」、感情的には「満ち足りること」、知的には「納得すること」をどこまでも追求しようとする強い衝動を内にもっている。言い換えればあらゆる好ましいことを覚知（感性的感覚と知的認識）の対象・内容として自分の意識的体験にしたいということが、人間の根本的習性としてあり、それが我々を深いところから突き動かしているということだ。意識をもって生活している我々人間にとっては、覚知できることがすべてだといってもいいだろう。（「覚知至上主義」）

ところが、道元禅師の書かれたものをひもとくと（たとえば『正法眼蔵』現成公案を参照）、「我々の覚知にははっきりとした限界があること。この有限な覚知でもって、無限なる諸仏の悟りそのものをとらえることはできないこと。」が繰り返して説かれている。だから覚知として体験されたことを証や悟りとしてはならないのだ。（「覚知にまじわるは証則にあらず」『弁道話』）道元禅師の教える坐禅は、覚知を含みつつそれを越えた（「包越」）、覚知の対象には絶対なりえない「非覚知の事態」なのである。（この「非」は「非思量」の「非」と同じ用法である）

他の多くの「瞑想法」は、覚知の範囲内での出来事を問題とし、そこに焦点をあてた行法に終始している。つまり、覚知を特定の状態に向けて統制・統御していくことが行の中心になっているのだ。

その意味でそれはやはり「覚知至上主義」に基づいており、非覚知の次元のことなどその発想すらないように見える。これに対して、坐禅は覚知を無視するわけではないが、重点はその覚知を「包越」し、覚知を覚知たらしめている非覚知の方にある。だからこそ、覚知の範囲にどのような出来事が起ころうとも、それを自分の考えで処理しようとせず、ただ現れたり消えたりするのにかまかずにありあわないでいればそれでよいとされるのだ。坐禅では、覚知のなかにその時その時自然と現れてくるものをそれと知るだけのことで、そこに何か特定の状態を現出しようとはからったりしないのだ。

我々としては覚知を精一杯用いて坐禅をしているのだが（そしてそれしかできないのだが）、その坐禅の総体はあくまで覚知を包越した非覚知なのである。このような非覚知の坐禅を非覚知のままに行じるためには、我々の習性である覚知至上主義のなかに坐禅が取り込まれてその本質が見失われてしまわないようにこころしなければならぬ。

たとえば、前回と今回で、坐禅において体感される微妙な「全一感」や微小な「動き」のことを書いたが、これらは普段はなかなか経験することのできないある意味では心地よい感覚だ。それに坐禅が深まるにつれ知覚力がシャープになるので、普通の五感の閾値を越えた不思議な感覚を体験することも時々ある。だから、なかにはそれに味をしめて、そちらの方にばかり関心が向いてしまい、そこに重みをかけすぎると当然出てくる。また、「禅とは坐禅によって悟りという霊妙な洞察を得ることだ」という通俗的理解に基づいて、自分の描く「悟り体験」をめざして一心に坐禅修行に励む人もいるだろう。

本人達の自意識においては高尚なことを真摯に求めている（求道している）のだと思っていることだろうが、結局のところ、それは自分の覚知の範囲内に望むもの（ある特定の感覚、感情、知的理解など）を所有しようとしてやっきになっている凡夫性丸出しの姿でしかないのだ。へそくり袋の中に、自分が素晴らしく価値があると思えるものを入れて、満悦の気分に浸りたいと願っている人の姿を思い浮かべればよいだろう。

覚知は坐禅の一部ではあっても坐禅のすべてではない。だから覚知をいくら云々詮索しても、それだけでは坐禅の全体をおおいつくしたことはない。坐禅の全体は『普勸坐禅儀』でいわれているように「声色の外の威儀 知見の前の軌則」（声色・知見＝覚知）というあり方をしているのだ。そのことを踏まえた上で坐禅における覚知についてさらに参究してみたい。

（一）坐禅においては眼・耳・鼻すべて開けっ放しになって外界に開かれているから、当然ものが眼にうつり、音が耳に入り、匂いが鼻にとどいてくる。さらに、体のなかではあちらこちらでさまざま身体感覚が体感されるし、いろいろな思いや感情が次々と浮かんで消えていくのが体験される。こうした六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）を通じてもたらされる種々雑多な材料によってその時々覚知が構成される。（ここで私が「覚知」という言葉で指しているのは、そうした個々の材料ではなくそれらがある有機的構造をもってできあがっている一つの「全体的まとまり」のことである。）刻々の覚知はそれぞれ独特の様相をもち、さらにそれが切れ目なく

移って千変万化していく。

川がその表面に無限の相貌を絶えずあらわしながら流れ続けていくように、覚知は坐禅のなかで無限の様相を呈しながら展転していくのだ。坐禅が坐禅として行ぜられているところでは、覚知がどのような様相として現れようと、それはまぎれもなく坐禅の「一表情」なのであり、どの覚知も等しく坐禅のなかの「一風景」なのである。そしてこのいちいちの「表情」、「風景」はどれもこれも、坐禅にとってはその時その時の絶対的な真実なのであり、「この覚知の様相は善いが、あの覚知の様相は悪い」「こういう覚知はあってよいが、ああいう覚知はあってはならない」といったような比較対照をする余地は全くないのだ。坐禅中には覚知に対して、善悪是非の相対的な価値判断もちこむというようなことは一切しない。「こんな覚知がおこってしまったけどこれでいいのだろうか。こんな覚知はおこしてはいけないのではなからうか。・・・」そういう余計な心配をして覚知を自分の思いの枠にとじこめてはならないのだ。「善悪を問わず是非にかかわることなし」という『普勸坐禅儀』の言葉は、「自分の狭い善悪是非の了見を坐禅のなかにもちこむと、覚知を抑圧したり縮こまらせたりする結果をまねくから、やめなさい」という指示を含んでいると私は理解している。心理療法で最も大切なことの一つは、クライアント（来談者）が安心して胸襟を開き、なんでも丸出しに表現できる治療的場をつくることだといわれているが、坐禅においてもおなじようなことが言えるのではなからうか。つまり、どんな覚知でも安心して、隠し事やごまかしなしにそのまま丸出しで自由に現前してくることができるような条件を備えた坐禅でなければならぬのではないか。我々は覚知をしるのではなく解き放つような坐禅をめざすべきではないだろうか。

坐禅は、覚知を遮断して無覚知の世界に安住しようとするような逃避的な営みではない。だから坐禅中に覚知を邪魔者扱いにして外にしめだそうとするようなせせこましいことはしない。覚知は坐禅にとって「これがあっては邪魔で困る」というような代物ではないのだ。「一翳の眼を遮るなく、一塵の足を受くるなし。何れのところにか塵埃有らん。何物か遮障を為さん」（けい山禪師の『坐禅用心記』）というのは、坐禅にとってはどんな覚知であっても障りや煩いにならないということだ。坐禅は、覚知をのびのびと自由に遊ばせながら少しもそれにこだわらない度量の大きさを持っているのだ。

また、坐禅は、自分好みの覚知の様相をつくりあげようとする能動的・意図的努力でもないし、覚知の特定の様相だけを確保しようとするえり好み行為でもない。覚知を生活の中心に据えて生きることを当然のこととし、それに何ら疑問を持つことがない我々は、自分の覚知の様相がどうであるかということに極度の関心を持っている。だからそれをいろいろとコントロールする技法が長い時間をかけて洗練されてきた。だが坐禅はそういう覚知至上主義を批判的に乗り越えようとする努力の上に成立したものだとは私は思っている。坐禅は、そういう「覚知統制的行法」に対して根源的な批判を含んでいる。「覚知はあなたの正体ではありませんよ。覚知ばかりを追いかけるのは自分の影を追うようなものではありませんか。覚知のなかに首をつっこむのをしばらく止めてみたらどうですか。そうすればもっと広々とした世界に親しむことができるのに・・・」

我々は覚知から逃げるにしても、またそれを追い求めるにしても、事実それを行うときには必ずある身心の構えをとらなければならないのだが、坐禅の正身端坐は覚知に対して「逃げもしない、追いもしない」という独特の構えなのだ。武道には「無構え」（鹿島神流）あるいは「自然体」（柔道）といわれる、相手に対する攻撃でもなく防御でもない、そういう“実”の動きが発する以前の“虚”の構えがある。その構えは不動でありながら、死に体（技に転じる可能性のない態勢）ではなく臨機応変の技を自在に生み出す無限の創造性を秘めているといわれている。正身端坐で坐するというのは、あらゆる覚知に対して、この「無構え」で臨みそれを守ることだといえるだろう。

覚知に対する恐れ、敵意、あてや見込みなどをあらかじめ坐禅に持ち込んで、取捨憎愛の思いをもって坐っているのは、坐禅中に次々と現れてくる覚知に対してこういう「無構え」の姿勢をとり続けることはできない。だから、まず、どんな覚知が起ころうとも、坐禅はそれによって少しも汚されるものではないから安心して「無構え」をねらって坐っていればよいということをよく確信しておくことが必要だ。（覚知が本来空であることへの洞察がその基盤となる）そしてあとは行を積み重ねることによってその「無構え」を体得し深めていくのだ。

このように、正身端坐で覚知に対して「自然体」で坐っている限りは、或る覚知がその時そのように起きてくるのにただ任せているだけなのだ。『坐禅用心記』にある「一切不為 六根無作」という文句は坐禅の行者のそういう態度を指していると思われる。従って、なぜその時そういう覚知をしたのかと問われても、たまたまその時そういう覚知が坐禅の全体から自然に生起してきたのだから、「私はそれに全く関知していないから知らない」としか答えようがないのだ。

大空のなかでは、あちらこちらでいろいろな雲がどこからか現れ、行き来し、どこへともなく消えていく。こうして大空全体の様相は次々と移り変わっていくのだが、この変化の過程には無限数の要因が関与しているから、それを普通の単純な因果関係によって記述・説明することも、それをこちらの思い通りに統御することも到底不可能だ。その瞬間になぜそういう様相が現れたのか、つぎにどういう様相に移り変わっていくのか、それを見ている我々にとっては「不可思議（言説思慮の及ばないこと）」としか言いようがない。大空自身にそれを尋ねてもやっぱり「知らないよ」と答えることだろう。にもかかわらず、大空は事実、なんともない顔をして自由自在に様相を変えて倦むことがない。我々にできることは、ただそれをそのままじっと眺めて楽しむことだけだ。

坐禅のなかの覚知もそれと同じではなからうか。坐禅している当人のあずかりしらぬところから、覚知が少しのよどみもなく刻々にさまざまな様相をとって現れ続けているのだ。その過程自体は、坐禅している者の覚知の力を越えた、覚知によっては把握することのできない無量無辺のあらゆる縁の働きによって導かれているのである。我々は覚知以上のものからの恵みによって「そうさせられて」覚知しているのだ。しかし、その働き、その恵みそのもの、つまり「そうさせられて」の部分は覚知の対象には絶対ならない。だから我々にはあたかも覚知が覚知自身で一人歩きしているように見えて

しまうのだ。それが「覚知的わたしがいて、それが覚知の主体である」という根本的錯覚が生まれて素地となるのだ。しかし、事實は、覚知が起きていることそのものには覚知自身の関与する余地がまったくないのだ。覚知はその意味でキリスト教でいうところの創造主に対する「被造物」と同じような立場にあるのだ。したがって「覚知的わたし」は結局のところ覚知に対して全くお手上げ、処置なしなのだ。だから、覚知的わたしにできることは、「みこころのままになしたまえ」という態度で、その時その時与えられたありかた（様相）を文句なしにそのままにいただくことしかない。

覚知の裡に事實はたらいで、覚知を覚知たらしめながらそれ自身は覚知を越え、覚知によっては決して届かない何かがあたしにある。それは、それなしには覚知がそもそも存在しないようなかなのだが、覚知にうったえることばを使って「これこれしかじかのもの」とは決していえないようなものだ。つまりそれに述語のつけようがないありかたをしているのだ。だから、禅ではたとえば「たれ（誰）」という疑問詞を使ってそれを指し示す。（「非思量にたれあり、たれわれを保任す」『正法眼藏坐禅箴』）「非」という接頭辞に単純な否定ではなく「包み越える」という独特の意味をもたせる禅の語法を借りて、私はその「何か」を表すために、「非覚知の事態」というこねない言葉を前回使ってみたのだ。

ここでいう「非覚知の事態」とは具体的には坐禅の全体（坐禅している当人とその環境すべてをひっくるめたもの）に他ならない。坐禅における覚知のありようはこの「非覚知の事態」との関係という文脈において参究していく必要があると思う。それを抜きにして覚知にばかり焦点をあてると、覚知を過大に評価しすぎたり（たとえば坐禅と瞑想の混同、坐禅の心理主義的偏向など）、逆に過少に評価しすぎたりする（たとえば坐禅において覚知が果たしている重要な役割の軽視・無視、坐禅の外観にばかり注意をむける表層的坐禅観など）ことになり、覚知を正しく坐禅の中に位置づけることに失敗しかねないからだ。

坐禅の全体＝非覚知の事態は覚知と同次元のものではないが（「不二」）、坐禅の全体が覚知となって自らを表現する（逆にいえば、覚知が非覚知の事態を反映する）というありかたで直に接している（不二）のだということに眼をつけなくてはならないと私は思っている。ここから坐禅修行のしどころとして二つのことがあげられる。一つは、覚知の根源・主体は覚知そのものではなくあくまでも非覚知の事態の方なのだということをごくまでも見失わないこと。つまり、坐禅の全体から覚知が一方向的に生み出されてくるのであって、この本末関係をくらませないこと。もう一つは、非覚知の事態からのメッセージを歪曲や雑音なしに正確精密にききわけること。それと同じことだが、非覚知の事態を忠実にそのとおりに反映した覚知であること。坐禅における覚知がこういう質をもつような入り方はどうなければならないのだろうか。

坐禅に関して、「心意識の運轉を停（やす）め、念想観の測量（しきりょう）を止（とど）む」（『普勧坐禅儀』）ということが言われる。これは心意識や念想観を敵にまわしてそれらを単に除去・廃止するというのではない。それが意味するところは、こころを自分の望むとおりに統制しある特定の精神状態をもっていこうという自我意識に根ざす思いはからいやつくりごと（「自調の行」）が一切

やんで、自我意識以前のところで出てくるおのずからなるいのちのはたらきのままにまかせているということだ。停め、止むべきは、自分がある目的やアテをもって積極的にここを使う「運転」や「測量」という意志・意欲的活動であって、精神活動そのものではない。心意識の運転が停み、念想観の測量が止まっても、坐禅のなかでは、思い量りのないままで覚知が活き活きと現じている。『正法眼蔵 坐禅箴』にある「不思量而現（不思量にして現ず）」という言葉の通りである。

このように、心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて、覚知が「不思量而現」という状態になることが、覚知が坐禅の忠実な反映になるための不可欠の条件の一つなのだ。しかしそれは実際なかなか容易なことではない。

《断想 23》で触れた「覚知至上主義」で生きている我々は、覚知の内容を自己の全体だと思い込む過ち（覚知と自己との同一視、つまり「覚知的わたし＝自己の正体」という錯覚）を犯してしまいがちだ。だから普段我々は、覚知の内容に一喜一憂するし、自分の都合や好み、考えて覚知をいつもコントロールし、処理しようとしている。こういう「癖」を坐禅のなかにもちこんでしまうと、先程ふれた「運転」や「測量」に終始して坐禅がセルフ・コントロール（「思量而現」）の一方法になってしまい、坐禅が「不思量而現」という本来の面目を失ってしまう。この我々が持っているどうしようもない癖から坐禅を守るためにはどうしたらよいのだろうか

まず、自分が覚知と自己を同一視してしまっているというその実態を、自分の日常の思考や言動に照らしてはつきり認識することだ。そして、覚知と自己を同一視することは大きな誤解であり、自分の勝手な思い込みにすぎないということを知性を使って十分納得する必要がある。覚知は自己の一部ではあっても自己のすべてではないということ、**「なるほどそうか」と深くうなづくところがなければならぬ**。しかし、こういう根深い癖というものは、頭で納得したくらいではなおるものではない。坐禅は、「覚知的わたし」という夢から覚めて「自己の正体」に帰ることを実地にやることなのであるから、やはり最終的には実際に正しい坐禅をする工夫を通してしか、この癖を根本的に矯正する道はない。

坐禅を試みてみればすぐに思い知らされることだが、自分が覚知と自己を同一視している限り、ただ単純にそれを覚知として受け取れず覚知の内容にどうしても過剰に反応してしまい、それにひきづられてしまう。そして、肝心の正身端坐の努力を忘れて覚知の中身を相手にしてそれをやり繰り返すほうに重心をかけてしまうのだ。そして坐禅が坐禅でなくなってしまう。我々は坐禅中刻々に、正身端坐に深まるかそれとは相容れない覚知の中にとりこまれていくか、その岐路に立たされているのだが、大抵の場合知らず知らず（あるいはそれと知りつつ）後者の方へよるめいて行ってしまふ。我々は坐禅のこういう難しさをしみじみ味わうことによって、この同一視の強さ・根深さ・しつこさをあたためて体験させられるのだ。

しかし、我々坐禅修行者としては、そこに停滞している訳にはいかない。さもあらばあれ、それでもなお覚知への感溺から刻々覚めて新たに正身端坐の方向にとってかえすという努力を何度でも繰り返すしかないのである。こういう精進が実ってだんだん坐禅に「慣熟」してくると、覚知と非覚知の事態（＝坐禅の全体＝自己の正体）との区別がつくようになる。すると正身端坐と覚知がもはや以前のような葛藤・対立関係には入らず、むしろ覚知が正身端坐の役に立つようになってくる。実は問題の根は覚知そのものではなく、覚知に対する我々の態度、関係の持ち方にあったのだ。それが変容してくると、覚知に浮足立ちそれにとりこまれて踊らされてしまうのではなく、その覚知を調身・調息・調心への手掛かりとして坐禅に有効に生かしていけるようになってくる。そしてさらには覚知が正身端坐の欠かせない一部としてそのなかに融合・統合されていく。こうして覚知が坐禅と一枚になり坐禅の覚知（「不思量而現」の覚知）になってくると、覚知そのものに新しい展開が起こってくる。『坐禅参究帖』（七）、（八）、（九）で触れたような微妙な全身の一如感や微細で多様な動きの体感などは、そうした覚知の実例である。

坐禅における覚知に関してはまだ論ずべきことがあるが今回は紙面の関係でここで止めることにする。坐禅を行ずる者として常に心得ておくべきことは覚知が覚知として正しく生かされているような坐禅をすることだ。そういう坐禅のなかでは、普段の煩悩に相応した覚知が「坐仏」の一部となって活き活きと働いているのだ。覚知が「成仏」しているような坐禅をどう坐るか？それが問題だ。

海外での行事

●ヨーロッパ曹洞禅会議 場所：Villa Sacro Cuore
ミラノ イタリア
期日：1月14、15、16日

●北アメリカ曹洞禅会議 場所：禅宗寺 123 South Hewitt Street
ロサンゼルス
期日：2月25、26、27日

●平和のための地蔵

アメリカ・オレゴン州にあるGreat Vow Monastery（大願寺）の二人の堂頭の一人であるベイズ・澄禅師は、「広島・長崎への原爆投下60周年追悼平和のための地蔵」という運動を首唱しています。かわいいことは www.jizosforpeace.org までお問い合わせください。

ニュース

©2004年10月11日－11月10日

伝道教師研修所が愛媛県新居浜市にある瑞応寺で開催されました。北アメリカから3名、ヨーロッパから5名が参加。